

調節池事業をもっと知りたい！と思ってもらうために ～城北中央公園調節池工事における戦略的な広報の取組について～

1. 城北中央公園調節池工事の概要

城北中央公園調節池は、都立城北中央公園の地下に石神井川の洪水の一部を貯留する箱式の調節池である。

全体事業（総貯留量 25 万 m^3 ）を二期に分け、現在、ケーソン 2 函を沈設する一期工事（貯留量 9 万 m^3 ）を進めている。大規模なコンクリート構造物を構築するため、全体事業期間は、約 20 年間と長期に渡る事業である。



【全体写真】

2. 調節池事業における課題

大規模かつ長期事業となる調節池工事では、工事車両の往来、振動・騒音、工事期間中は公園の一部が使用できなくなるなど周辺住環境へ与える負荷が大きく、「なぜこんなにも時間がかかるのか」と言った声が地域住民から寄せられる。特に負担のかかる現場近隣の地域住民には“より深く継続的に”理解と協力を得る必要があるため、技術的な負担軽減方策に加えて、事業に対する理解促進を目的とした広報や PR などを戦略的にアップデートしていくことが求められている。

3. 戦略的な広報の取組

当所では、従来実施してきた広報・PR や、工事説明会等の情報発信について実施方法や効果を分析した。その分析結果を踏まえ、「オープンに」「何度でも」「記憶に残るように」を基軸とした広報・PR・情報発信を実施することとし、地域住民が“調節池事業をもっと知りたい！”と思えるような機会・環境を整えることに注力した。その中でも特に反響の大きい事例を紹介する。

3. 1 見学会の積極的な開催 - オープンに、何度でも -

これまでに実施してきた工事説明会は、実際に対面し対話を行うことができるため、広報版や HP 等のような一方的に情報を発信するコンテンツに比べて事業を深く理解してもらう機会としている。

一方で、開催頻度は工事前に一度開催するのみが多く、“より深く継続的に”関心を持ち続けてもらうには頻度が足りない。また、工事が始まる前なので、現場でどのようなものが造られていくのか具体的なイメージがしにくい。そこで、対話できる機会のハードルを下げ、具体的に何が造られるか知ってもらうため、

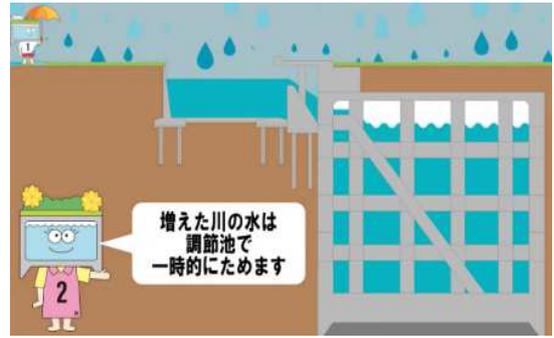


【見学会の様子】

見学会を開催し、現場を「オープン」にすることが効果的と考え、区と連携し地域の町会や小学生を積極的に現場へ招いた。概要説明には、調節池の仕組みや効果、どのように造られていくのかをイメージキャラクターが立体的なアニメーションで説明する事業 PR 動画を作成し、幅広い世代の方々がわかりやすく、聞きやすく、親しみやすいものとした。

現場の見学は、受注者の協力のもと、スケールが伝わりやすいビューポイントを設定し、そこへの導線の確保など安全対策を万全に行った。見学者は深さ約 30 m の調節池のスケール感や地下神殿のような神秘的な景観に見入っていてとても興味深く見学されていた。また、実際に対面し、対話することで地域住民の率直な意見を聞くことが出来ることに加え、現場の苦勞や、技術的な工夫で地域の負担低減に努める姿勢を明確に伝えることが出来ている。

現在、見学会は週 1 回程度開催し、「オープンに」した現場を「何度でも」見てもらえるような環境を整えており、見学者数は累計 1,200 名以上となっている。



【事業 PR 動画】

3. 2 思い出しやすい環境整備 - 記憶に残るように -

見学会等で得た関心や理解を継続して持ち続けてもらうには、記憶に残るような環境整備が重要となる。

見学会では、IKE カードを記念に配布することで、いつでも体験を思い出し、「記憶に残るように」した。

これに加えて、どこでも簡単に情報を入手できるように、工事用 HP や YouTube に事業 PR 動画を公開するなど、デジタルコンテンツを充実させ、これらへ誘導するための環境整備を戦略的に行った。現場付近に設置しているパンフレットや広報版、見学会で配布する IKE カードのような紙媒体には、QR コードを添付することでデジタルコンテンツへアクセスしやすい環境を配備した。

また、多くの地域住民が散策を行う城北中央公園の園路から調節池が造られている様子がよく見える位置にパンフレットや広報版を設置し、日々の生活の中で事業について思い出し、「記憶に残るように」した。



【IKE カード】



【散策路から見える景色】

4. まとめ

長期的かつ大規模な工事を着実に進めるためには、“より深く継続的に” 事業を理解し続けてもらう必要があり、効果的な情報発信を行うことがこれまで以上に求められている。

今回紹介した「オープンに」「何度でも」「記憶に残るように」する取組を実施することにより、地域の理解と協力を得られるよう努めてきた結果、本事業はこれまで大きな問題はなく工事を進めることが出来ている。また、多くの地域住民からこの現場だけでなく、“調節池事業をもっと知りたい！” “といった声も聞こえてくるようになってきた。

今後も、戦略的に広報・PR を行い、二期工事や調節池事業全体の円滑な推進に繋げていきたい。